皇太子妃きまる

朝日新聞
発行所
朝日新聞東京本社
東京都千代田区有楽町二丁目三番地
電話 和田倉(20)1311,231
振替貯金口座 東京1730番
© 1958

号外

正田美智子さん

皇太子さまがご懇望

（日清製粉社長令嬢）

宮内庁では、かねてから皇太子、継宮明仁（つぐのみや・あきひと）親王殿下のご婚約のお相手を選考していたが、十一月二十七日午前十時から皇居で開かれた皇室会議（議長岸首相）で「皇太子殿下と正田美智子（しょうだ・みちこ）さんの婚約について」審議した結果、これを承認した。直ちに宇佐美宮内庁長官は両陛下、皇太子さま、正田家にこのむねを報告するとともに、記者団に発表した。

初めて民間から

愛情に支えられて

正田美智子さんは東京都品川区五反田五ノ六〇、日清製粉社長、正田英三郎（ひでさぶろう）氏（五五）の長女で二十四歳。昨年東京渋谷の聖心女子大英文科を卒業、現在は好きなテニスと手芸、料理などのけいこごとにいそしんでいる。高等科、大学とも優等生で通し、とくに英語の力はずばぬけていた。理知的で気品あふれる容姿は学友間でも評判だった。会う人に落着いた感じをあたえる、お嬢さんというよりは若奥さまといったタイプである。社交のセンスも十分あり、一㍍六十一㌢（五尺三寸）、五十㌔、中肉中背、スポーツ好きで、健康そのもの。皇太子さまにはピッタリの女性である。

昨年八月、軽井沢のテニスコートでたまたま顔が合ったのが交際のきっかけ。そしてテニスを通じてめばえたお二人の愛情は、皇太子さまの強い意志に支えられ、今日の実を結んだのであった。

美智子さんは元皇族でも、元華族でもない。一実業家の娘さんである。「国民とのつながりを深めたい」という皇太子さまのご希望と「将来の皇室の在り方を考えて」宮内庁首脳部は選考の重点を家柄より人物においたという。この線にそって元皇族、元華族からワクを次第にひろげ、六年間調査してきたが、数百人の候補から最後に、皇太子さまはもちろん宮内庁首脳部がえがいた理想の女性として美智子さんが浮んできたのだった。

一般家庭のお嬢さんから皇太子妃へ――しかも皇太子さまご自身が交際され、選ばれたということは皇室史上画期的なことである。皇室の在り方の、ひとつの大きな転機となるご婚約といえよう。

なお美智子さんは、皇室会議の報告をうけてこの日の午後、両親とともに皇居を訪れ、両陛下にごあいさつ、つづいて別室で皇太子さまとお会いする。結婚式の日取りはまだきまらないが、早ければ来春、遅くも来秋には古式によって行われる模様である。

壁を破った「人間皇太子」

皇太子さまは、正田美智子さんを得て喜びはひとしおである。「この問題だけは私の意志を尊重してほしい」という積極的なお気持が、宇佐美宮内庁長官や小泉信三氏ら選考首脳部にあたたかく見守られながら、いくえもの壁を貫き、今日の実を結ばせた。いままでの皇室にありがちな、くだいて食べやすくしたものを口まで運んでもらう「スプーン・フィーディング」の生活におぼれていたら、あるいは人形のように、ご自分の意志さえ表明できなかったに違いない。

妃候補の選考がはじまったころから、皇太子さまは「旧皇族、元華族でなくともよい。君たちはなんとも思わないだろうが、限られた範囲からだと、国民との間が遠くなるように思う」と学友にもらし、「皇后はホステス（接待のときの女主人公）としても優秀でなくちゃあならない。「皇太子さまは冷たい感じ」「若さが足りない」という評をときにきくのも、いまなお、そのご身辺をめぐる古い空気を意識しておられたのかも知れない。皇太子さまは、この古いカキネをやぶって、いま、新しい芽をふき出させた。

「皇太子さまは恋ができない方」いからね」と選ばれる妃の公的活動面をも心配されていたようだ。皇太子さまは〝新しい時代の皇室のあり方〟についてかねがね考えておられ、そこからこうした結婚観をもたれるようになったのであろう。

だが、皇室をとりまく古いカキネはまだ、かなり根強く、よどんだ空気も残っている。とくに、皇太子という地位にいろいろ制約があり「自由の場」は少なくしてほしいとの声もあるようだ。

⇧きょう両陛下にお会いする晴れ着で

この言葉は妃候補の選考がはじまったころ、学友や宮内庁関係者がもらし、一般もそう信じていた。ところがみごと、美智子さんを得られた。それも、水きわだったやり方で……。

正田家のいくどかのご辞退に対し、皇太子さまご自身で美智子さんに電話をかけられ、皇太子さまを愛しながらも去就に迷っていた美智子さんの心を支え起した。このころが「人間皇太子」の面をムキ出しにして、ひたむきに走りつづけた時期だったようだ。いま、皇太子さまの喜びは大きい。美智子さんとともに新しい〝皇室づくり〟への決意を胸に固めて……。

喜ぶバイニング夫人

【ワシントン＝中村米州総局長発】皇太子さまご婚約の報を聞いて、皇太子さまの英語の家庭教師だったバイニング夫人はフィラデルフィアで喜びを次のように語った。

皇太子さまがその女性をお選びになったのは、その女性の個性と性格に基いてでしょう。独立心と向上心、そしてよい判断力を持つ皇太子さまが、ご自身にとって最善の道を選ばれたのは間違いないことでしょう。側近の助言者たちも、このことを確信していると信じます。皇太子さまの観察力は真実で正確でした。

学者の多い正田一族

もとは群馬の素封家

東京都品川区五反田五ノ六〇、池田山にある延べ七十坪余りの地味な二階建洋館に、家族六人がすむ。夫妻とも外国生活の経験があり、西欧的な教養と生活様式が身についた一家といってよい。

祖父貞一郎氏（八八）祖母きぬさん（七八）はともに健在。貞一郎氏は日清製粉の創始者、東京高商を出て郷里群馬県館林のしょうゆ醸造業から独力で築き上げ、社長を英三郎氏に譲った後は同社相談役。東武鉄道会長を勤めたこともあり、戦後貴族院議員に勅選、産業功労者として藍綬褒章をもらった。館林市名誉市民でもある。

大阪大学学長、学士院会員正田建次郎氏（五六）は父の実兄。日本の抽象代数学の開拓者で、若くして学長に選ばれた人だ。そのほか東大理学部教授水島三一郎氏は義理の叔父、同助教授正田篤五郎氏は叔父と、一門には学者が多い。母方の親類も東銀小樽支店長副島貞郎氏などみな経済界の中堅幹部となっている。

正田家はもともと群馬県館林の素封家で、米問屋を営んでいた。さかのぼると新田義貞を生んだ新田家の重臣生田隼人重幸から出たとの説もあるが、のち姓を正田とあらためたという。ともかく生粋の民間人である。

属高校一年生。そろって優等生で「秀才の一家」という評判である。夫妻とも外国生活の経験があり、西欧的な教養と生活様式が身についた一家といってよい。

祖父貞一郎氏（八八）祖母きぬさん（七八）はともに健在。貞一郎氏は日清製粉の創始者、東京高商を出て郷里群馬県館林のしょうゆ醸造業から独力で築き上げ、社長を英三郎氏に譲った後は同社相談役。東武鉄道会長を勤めたこともあり、戦後貴族院議員に勅選、産業功労者として藍綬褒章をもらった。館林市名誉市民でもある。

大阪大学学長、学士院会員正田建次郎氏（五六）は父の実兄。日本の抽象代数学の開拓者で、若くして学長に選ばれた人だ。そのほか東大理学部教授水島三一郎氏は義理の叔父、同助教授正田篤五郎氏は叔父と、一門には学者が多い。母方の親類も東銀小樽支店長副島貞郎氏などみな経済界の中堅幹部となっている。

正田家はもともと群馬県館林の素封家で、米問屋を営んでいた。さかのぼると新田義貞を生んだ新田家の重臣生田隼人重幸から出たとの説もあるが、のち姓を正田とあらためたという。ともかく生粋の民間人である。

結納は一月、来年中に挙式

ご婚約期間中の諸儀式および結婚式の運びは、だいたい旧皇室親族令にならって行われる模様である。これによると、結納の取交わしである納采の儀が行われる一両日前に、賢所、皇霊殿、神殿に成約奉告の儀というのがあり、同時に伊勢神宮、畝傍の神武天皇山陵、多摩の大正天皇山陵にお使いが遣わされる。

宮内庁では納采の儀を来春一月に行う意向だが、ついで天皇から美智子さんに勲一等宝冠章が贈られる「贈勲の儀」、皇太子から守り刀を贈る「贈剣の儀」、天皇が結婚式の期日を告げる「告期の儀」、結婚式の前日皇太子さまが和歌をしたため、美智子さんも返歌を贈る「贈書の儀」というのが婚約期間中に行われる。

そしてこの間、美智子さんは皇室のしきたりや諸儀式の見習い、外交団との応接に必要なエチケット、未来の皇后としての心構えなどいわゆる皇后教育を受け、ときには東宮仮御所、音楽会、テニスコートなどで皇太子さまとお会いする。

衣冠束帯、十二単衣の古式によって来年中に結婚式を挙げられたのちは、いま赤坂の大宮御所跡に建築中の新東宮御所（千百坪、洋風二階建）ができるまで渋谷の東宮仮御所で新婚生活を送られる。